

## 第3部

### 創成期における 学会活動

---

日本行動計量学会会報は、この号で第3号となる。第2号によると、会員数500人にもう一步とあるが、今は600人にあと一步というところだという。会員数の順調な伸びは事務局各氏の努力にも負うところが大きい、何といてもこの学際的分野が世の関心を集めているからだろう。

したがって、各種の研究会が学会のアレンジでいくつも、そしてまた各地で開かれ、その出席者も少なくないという。わたしはもちろんそう多くの学会を知っているわけではないが、しかし、学会主催でのこうした研究会の盛況は珍しいのではないかと思う。もってこの学会の発足が干天の慈雨だったことを知るべきだ。

これらの研究会は、学会運営委員会の「若い」諸兄の企画、実行にかかる。運営委員には年齢制限があって40歳後半になると資格がないのだそうだ。老眼鏡のやっかいにまだなっていないわたしなど木戸をつかれて大いに不満な気がしないでもないが、ここに若い学会の、したがって若い学問の気力を認めて満足すべきなのだろう。

運営委員からはじき出されて、わたしは編集委員になった。国語の方を専門としていて、しかも老人？というわけか、和文誌の編集幹事の責任者ということにされてしまった。大変な名誉ではあるけれども、いささか実力がこれに伴わずといった感があるのは大方も認めるところで、当人もまたじゅうぶん承知している。

わたし自身はそう新しい理論なり方法論を生み出せるはずもないし、ただ、言語の實際例に通用することに興味を持って、いくつか江川清君（運営委員）といっしょにやっているに過ぎない。けれども、まあ何とか学会に一臂の力を貸すことができるとすれば、このくらいだろうと思って引き受けたのだ。

といっても編集者というものは一人でいくら力んでもどうにもなるものではない。いい原稿がどんどん集まってこなければ何ともならない。この点で会員の皆様のご助力を大いに望むのみだ。ひとつわたしを原稿の海に溺れさせ大いに苦しめてもらいたい。

今のところ半年刊だけれども、これは会員数と販売できる数とが飛躍的に増大すれば、年4冊も発行可能となる。忙しくなることは大いに歓迎だ。

われわれとしては、なるべくいろいろな分野の人に執筆してもらいたいと思っている。あまり偏りがないようにしたい。同時に創刊号の経験から、国語の表記にもう少し関心を持ち、ご自分の原稿の整理をされることを寄稿家諸氏に望みたいと思う。

[会報3号(1974)巻頭言、当時：理事・和文誌編集幹事代表・国立国語研究所、2004年度(第19回)功績賞受賞、2006年逝去]

## 欧文誌第1号刊行に当って

印 東 太 郎

和文誌「行動計量学」とならんで欧文誌「Behaviormetrika」を、年1号ずつ刊行することは本学会設立の事点から決まっていたようであるが、はからずも私がその仕事に当ることになった。編集委員は総計45名おられたので、その中から理事長指名により、野崎昭弘、宮原英夫、佐伯胖、松原望、岩坪秀一、丸山久美子の諸氏に実務をお願いすることにして第1号の編集を開始したのが昨年の秋であった。何しろすべてが from scratch (ゼロから) という状態であるから、まず出版社を探し、執筆要綱を決め、投稿を勧誘することから出発した。幸い日本出版貿易株式会社の協力を得ることができ、各分野から原稿も集り、第1号が刊行される運びになった。実は現時点では未だ現物は形になっていないが、この記事をお読みいただける頃には会員諸氏の御手許に届くはずである。従ってここに目次を紹介することは redundant というものであろう。

当分の間70~80ページのものが年1冊であるから、volume という言葉を用いず、すべて No. で統一することになっているので、これは「Behaviormetrika, No.1, 1974」である。表紙のデザインは林理事長の御紹介により、特にデザイナー佐藤敬之輔氏の手をわずらわせた。学会の専門誌としては、これは異例のゼイタクといわなければならない。

この第1号は、今後の本誌の性格を決定する枠組みとして作用するものと思われたので、編集には次の点に留意した。それは、その内容においても、そのスタイルに関しても本号を本誌の今後のあるべき姿の偏りなきサンプルとしたいということであった。もとより標本数が6では完全な代表になり得ないであろうが、分野としては統計学、心理学、社会学、スタイルとしても「数式だらけ」のものからひとつも数式を含んでいないものに及んでいることは事実である。御投稿頂いた方々に対しては勿論、御助力頂いたすべての方々に御礼申し上げたいと思う。特に編集の実務に当たられた上記6氏の方々の御苦勞は一方ならぬものであったことはここに明記しておかなければならない。

本誌は、毎年、9月をメドに刊行してゆく予定になっている。私共の理想は海外に相当数の定期購読者を獲得して外資をかせぎ、もって本学会の財政に寄与（より正確には学会の財政負担を軽減）したいということであるが、そのためには、内容が高水準でなければならないと同時に、刊行のスケジュールを狂わせないということも必要条件である。第2号に対する原稿×切りは本年末としているが、できるだけ多くの方から御投稿頂けることを期待している次第である。また、海外にキャンペーンを行いたいので、各専攻の分野で、定期購読者になりそうな個人及び機関の情報をお知らせ頂ければ、それだけ上記の理想の達成される日が早まるであろう。

[会報4号(1974)巻頭言、当時：理事・欧文誌編集幹事代表・慶應義塾大学文学部  
2000年度(第15回)功績賞受賞、2007年逝去]

## 第2代欧文誌編集委員長を担当して

松原 望

聖学院大学・東京大学名誉教授

日本行動計量学会欧文誌編集委員会は1973年7月頃に統計数理研究所2階の会議室においてその第1回設立会合を開いた。委員長は故印東太郎慶応大学教授（計量心理）、委員は佐伯眸（認知心理）、宮原英夫（医学）、丸山久美子（多変量解析）の諸氏および私（統計的決定）である。久保武士（医学）、上笹恒（計量心理）の両氏にも間もなく（あるいは当初より）ご参加いただき、いずれ劣らぬ各分野の指導的な名士から成る強力布陣でスタートした。数学者野崎昭弘氏のご協力もあったことの記憶もある。

論文誌は学会事業の命である。委員会の運営は、異なる分野からの互いに初めての集まりにもかかわらず、印東委員長の豊かな学識経験と温和な人柄から、当初より順調に進行し、最初の数回で難なく審査規定と投稿規定を定めた。現在の投稿規定（Information for authors）はほぼ当初の規定そのまま、細かい点まで配慮がいきとどきワープロ、ワード時代に通用するよくできたものである。雑誌創設の委員会であったから、雑誌名、装丁・内容フォーマット、ロゴの設定、印刷業者の選定などの重要課題があったが、これら諸課題も印東委員長のリーダーシップでとんとん拍子で進んだ。雑誌名はBehaviormetrikaと決定した。言語学者の野元菊雄先生から、behavioとmetrikaの間につなぎとしてrを介在させるのが言語学的に見て正当であるとのご助言をいただいたので、林理事長のもとで衆議一決した。雑誌名が決まったのであとはロゴのデザインであるが、これは林理事長の紹介で美術家の佐藤敬之輔氏の特別のご厚意によるものである。ロゴマークを持つ学会誌はそうあるものではなく、貴重な財産である。印刷業者（日本出版貿易）も委員長の紹介であり、海外頒布も行なっている業者を選定したのも、学会が海外に知られることを目指したからである。表紙装丁・内容フォーマットも当時設定したものが現在も用いられている。創刊号は招待論文を掲載し、小室直樹氏のパーソンの構造機能分析解説（英文）という異色のものであるが、これは林理事長のご紹介と思われる。印東氏のチョコレート選好の精密な計量心理学、佐伯氏のコンピュータ作曲の論文なども印象に残る。

印東氏の海外赴任のあと筆者が第2代委員長を数年間務めることとなった。委員会開催も筆者の勤務地（筑波）の関係から松戸など常磐線沿線の遠隔地が多かったにもかかわらず、丸山、宮原、久保、佐伯、上笹諸氏のご協力が一方ならぬものであったことはありがたかった。投稿も増え分野の厚みも加わり、雑誌は安定期に入った。異色の猪口邦子氏の投稿と論文掲載もこのころである。審査があまりに厳格であったため、林理事長から執筆者（特に若手研究者）の意欲を削ぐことになるからから、出来るだけ緩やかに審査することが肝要であるとクレームがついたこともある。その後、文部省の学術定期刊行物補助の申請を行い、首尾よく認可を受けたが、これには肥田野直氏（教育心理）のご助言が貴重であったことを記しておこう。

[元欧文誌編集委員長、1995年度（第10回）功績賞受賞]

## 行動計量学会でお世話になった人々

宮原英夫

豊橋創造大学リハビリテーション学部

私が行動計量学会と関係を持ったのは、学生時代から多変量解析に関心を持って高橋暁正先生、増山元三郎先生のところ相談に見えていた柳井晴夫先生に誘ってもらったことが縁だと考えている。行動計量学会は前身となる何回かの研究集会を経て誕生した。その何回目かの研究集会が統計数理研究所で開かれたときのことは今でも印象に残っている。柳井先生から根岸龍雄先生の講演の指定討論者を依頼されていたが、遅刻してしまった。講演が終わり、あらかじめ抄録を読んで用意した原稿に沿って質問を行ったところ、今日の講演ではこの話はしていない。大体、宮原君は遅刻してくるとは何事かと演壇からお叱りを受けてしまった。学会の設立当初は、日本医科大学の木村栄一先生、統計数理研究所の林知己夫先生、駒澤勉先生、東大物療内科の増山元三郎先生、高橋暁正先生、東大第一内科の長坂昌人先生、精神科の斉藤陽一先生らが計量診断、循環器疾患の多変量解析などを精力的に進めておられ、これが全国の医学関係者の関心を引いたこともあり、医学関係者の参加が多かった。医学データの統計解析の話題が、医学専門誌はもちろんのこと、一般の医学雑誌の紙面にも溢れていた。

その頃の私は高橋先生のグループに加わり、因子分析（重心法）を使った自律神経機能の分析に興味を持っていたが、分からないことだらけで困っていた。そうこうしている内にアメリカで一度だけお会いしたことがある印東太郎先生が因子分析の研究もされているということを知り文献を送っていただいた。この縁であろうか、学会が発足すると編集委員会の一員になり、それまでまったく別世界の存在であった心理学や文学領域の多くの方々と知り合いになることが出来た。特に松原望先生、岩坪秀一先生、柳井晴夫先生には、医学部では得られない考え方を教えてもらうことが出来た。その後欧文誌の編集委員にも加わることになったが、ここでも当時若手研究者であった上笹恒先生、薬師寺泰蔵先生、佐伯胖先生、丸山久美子先生から最新のトピックや新しい研究方法について話を聞くことができた。欧文誌編集委員長時代には論文の投稿が少なく、毎年文部省から補助金を受けることが出来る規定のページ数を確保するのに苦労したが、年度末きりきりで日本出版貿易の中村俊秀さんが何とか形を付けてくれた。編集委員会はメンバーの住所の中間という発想から松戸の駅の居酒屋で開かれることもあったが、統計数理研究所でしばしば開かれた。研究所に行ったときには委員会の前後に所員の大隅昇先生、村上征勝先生、柳本武美先生にも色々相談に乗っていただいた。このような方々の助いで、疾患の自然分類、脳血管障害の症状の重症度の尺度、MMPIの日本版の翻訳差の影響、疾病の頻度の国際間比較、漢方治療の有効性の問題、入学試験の信頼度など、自分の興味を持った問題をまとめ、学会誌で発表することができた。最後になったが、この機会に学会や諸先生に感謝すると共に、学際的な研究の遂行に当たって貴重なヒントを与えてくれる本学会のますますの発展を期待したい。

[元欧文誌編集委員長、第5回（1990年度）功績賞受賞]

当学会の正式名称には「日本」が前につくのであるが、そのように書くとあまりにもフォーマルな感じになってしまい、日常感覚に合わないの得上記タイトルでは省略させていただいた。

手元にある「第1回行動計量学大会 発表論文抄録集」を見ると、“1973年9月3日(月)～9月6日(木)於統計数理研究所”という文字が表紙の右下にのっている。30数年が瞬間に過ぎ去ってしまった感が強く、今や大変懐かしい思いで実に多くのいろいろなことが連想・想起される年代となってしまった。

発足の頃から今日まで、研究発表は勿論のこと学会運営等の中心的存在として非常に長く当学会にコミットして息長く大活躍をされている方々も多いし、初期のころには大活躍されていたのかかわらず、その後登場することもなくなってしまった方々もいる。世代交代も進み学会組織の新陳代謝のプロセスを見ることが、これまた現象として興味関心がもたれる。

当学会は、学会設立に至る前の研究会の準備段階から、立ち上がりの段階、そして今やテイクオフして成熟期に到達していると思われるのであるが、このように安定したフェイズに至るには多くの人々の努力と、やはり一世代にわたる時間が必要だと感じられる。

しかし、学問の世界の変化は情報技術の長足な進歩・発展とともに情報・知識生産の量的、質的發展が促進されて、その伝播・拡散が急速で広範囲に及ぶ様相はかつて人類の経験したことがない歴史段階に至っているといえるであろう。科学の世界の変動には瞠目すべきものがあるといえる。

このようなプロセスの中で私が貢献できたことはほとんどないに等しいが、当時の林先生をはじめ‘統数研’の方々の仲間に入れていただき、あまり活動的ではない会員ではあったが、それでもやはりいろいろな側面で研究マインドが養成できたことは大変ありがたいことであったと感謝あるのみである。

自分自身を振り返ってみると、要するに、コンピュータの「ROM」にダブらせて文字どおり‘read only member’と揶揄される、いわば周辺人だったといえる。つかず離れずひたすら読み取りのメンバーであったと思う。ごくたまに何かを書き込むことはあったがROMに徹していたタイプであるといえよう。

しかしながら、それは私にとっては甚だ面白く、興味・関心を持って大会発表、英文誌、和文誌等の論文をとおして、優れた会員・研究者の方々から実に多くのことを読み取らせていただきこれもただ感謝あるのみである。

今期の学会理事長鮑戸先生の学会ホームページの就任の挨拶、当学会の趣意書、その頃の研究グループの構成状況などからみて、非常に学際的なものが感じられるし、今後ものようにあって欲しいと思う。なぜならば、人間や社会の現象そのものがどうも分析的な研究のみでは現象解析が十分できないような、これもある歴史的フェイズに至っているからかもしれないのである。

言い古された学際的な研究を見直すきっかけが得られる多様な分野の融合する学会であるとういと思う。勿論、解析の方法論と応用分野の分担、協調も含めて。

[元欧文誌編集委員長]

## 水野欽司先生と日本行動計量学会事務局

岩 坪 秀 一

早稲田大学人間科学学術院・大学入試センター名誉教授

故水野欽司先生に初めてお目にかかったときは、行動計量学会が設立されたばかりで、30代前半だった柳井晴夫、丸山久美子、松原望、梶田叡一の諸先生、それに私が、それぞれお互い衝突しながらも若さにまかせて事務局を切り回していた頃であった。当時水野先生は名古屋大学に勤務されていたが、皆さんの熱気が名古屋にも伝わって来ますよ、と励ましていただいたのを鮮明に覚えている。

昭和50（1975）年10月に先生は統計数理研究所に移られ、第二研究部第一室長に就任、当時の所長林知己夫先生のまさに片腕としての活動を開始された。水野先生が庶務担当理事として事務局を担当されたのが昭和52（1977）年4月であり、在外研究員として米国に出発される直前の昭和57（1982）年3月までの5年間を本学会のために献身的に尽くされた。水野先生によって学会の運営体制が整えられたといっても過言ではない。欧文誌が刊行物補助金を受けようになったのも先生のご努力による。当時の本学会理事長でもあった林先生と緊密に連絡を取られ、学会の諸活動に不断に目を配っては適切な助言をされ、必要とあればどこまでも助力と協力を惜しまれなかった。いい加減な活動に対しては厳しく、私も具体的内容は忘れてしまったが、小グループ研究会活動で人に迷惑になるようなことを気づかずに進めてしまい、先生からこっぴどく叱られたことがある。日本人の国民性研究等本務でお忙しい中で900人近くの会員への発送準備を日曜にやられることもよくあった。無私の人、まさに先生にふさわしい言葉と思う。

先生が在外研究に出かけられることになって私が事務局を引き継ぎ、これを機会に学会事務センターに業務の一部を委託することになった。センターは約20年後に不幸にも破綻したが、委託したばかりの頃はセンター側に本学会担当の吉崎さんという若い真面目な方がいて随分と助けられたものである。センターとの頻繁にわたる委託の打ち合わせには、米国へ出発する直前のお忙しい時期にもかかわらず先生は常に私に同行されては緻密な内容確認をされ引継ぎが円滑に進むように細心の注意を払ってくださった。先生が出発されて事務局の仕事が始まってからも、航空便を出してはよく相談を持ちかけたものだった。そのたびに長い返事の手紙が届いた。事務局への誤解や理解されない私の悩みに対して、長い慰めの手紙が来たが、それを熟読して私も腹をくくったものである。新しい問題が起きたとき罪は自分が背負う覚悟で独断実行しなければならないこともあるのだ、またひょっとしたら汚いこともやらなければならない場合もあるかも知れない、事務局とは本当に悲しい存在だが、なに、これも人生修行なのだ、と。

先生が帰国されてからも判断に迷うときには即先生に相談した。私の事務局時代の重大失敗に刊行物補助金申請をすっかり失念したことがある。そのとき、刊行物補助金申請貢献者たる先生が、そんなに気にすることではないのだと心から慰めてくださったのである。この言葉が落ち込んでいた自分をどれほど救ったか、今でも忘れられない。

[理事、編集委員長、元事務局長、1993年度（第8回）功績賞受賞]

昨年度、行動計量学シリーズを学会から発刊することを目的として刊行委員会が作られ、3回に亘って会議がもたれました。現在第一段階として刊行物としてどんなものを取り上げてみるかの目安をつけ、出版社との交渉を始めたところです。

先ず行動計量学とは何か、という問題から委員の方々の意見の一致をみることを試みましたが、これはこの学問が多様性を内蔵しつつ発展生成中であるため甚だ困難であるということで、行動計量学のイメージを規格化することは当面は避けることに致しました。

そうして各人のもつイメージを中心に、これこそ行動計量学たるものと思うものを各人が書いて行くうちにイメージの定着化を図ろうということになりました。

次に内容についての議論では、大きくふたつに分け、方法と分野の両方面から問題にとりくんでいくのがよいだろうということになり方法に関しては計数と計量、分類と弁別、モデル構成、予測、決定、比較指標、パターン認識、シミュレーションなどがあげられました。また分野別としては、公害、世論、教育、健康、行動などがあげられました。

このような枠組を頭において各委員に自分が書くならこんなものをという形でのべていただいたものが次のようなものです。

決定と情報、人物評価、行動の変容、言語と音声、印象形成過程、計量言語学、計量政治学、心理的空間、地域分析、医療システム、計量診断、公害、災害と行動、健康など。

これらはまだ本の表題として生硬なものや、形を成していないものもありますが、出版社との交渉を通じて確定して行きたいと考えています。

始めに述べたように、行動計量学のイメージの規格化がなされていないので、あまりに発散してもどうかということで監修者を設けて大まかな交通整理をすることになりました。また適用例、データは必ず入れるように心がけ、説明は研究者のみを対象とせず丁寧に、かつ直感的なものにする。各巻毎にオーガナイザーを設けて著者が数人で書いてもよいことにするというのも意見の一致をみました。

以上がわれわれの委員会で議論してきたことのあらましです。これらの結果をふまえて出版社との交渉に当るのですが、理事長のあっせんで数社の出版社と交渉を始めているところです。

今年度新しい理事会の発足とともに、再び、刊行委員会をお世話することになりました。出版社との交渉や会計の問題も種々起ってくることでしょうが、会員各位の御支援によって何とか実らせて参りたいと思っています。

御意見などあれば、どしどし御申出下さるよう特にお願い申し上げます。

[会報7号(1975)巻頭言、当時：理事・統計数理研究所、2008年逝去]

## 「データ解析」随想

奥野 忠一

本会報33号の「ヴェルサイユの空は晴れていたか」という林理事長の巻頭言を拝読して、そのような文学的香気の高い文章はとても綴れないとしても、考え方に共通する部分があるのではないかと考え、一文を草する決心をしました。

最近、ある友人から「お前の本（多変量解析法）には、相関係数行列から求めた主成分分析（PCA）では、“回有値が1より大きいものだけを取れ”と書いてあるが、あれはどこかに原典があるのか、それともお前の発案か？」と聞かれました。

十何年も前に書いた本ですから、誰かの所説を見たのかよく覚えていませんが、しかしその頃からひとつの目安として推奨してきたのは事実です。ただその際、 $\lambda_1$ が0.97ならだめ、1.04なら採用、というように、 $\lambda_1$ を数学的に厳守せよとは言っておらず、単なる目安として示しているにすぎません。その根拠はふたつあります。PCAを計算するとき、 $n$ 個の対象を2組にランダムに分け、その「各組」と「全体」とについて3通りの主成分を求めることを勧めています。そして、その3通りの結果に共通な部分だけを解釈するように勧めています。この条件を満足するのは、概して $\lambda_1$ に対応する主成分であるという経験則に従っているのです。もうひとつの根拠は、取出した主成分は総合特性値であるという解釈に基づきます。もとの特性値の分散はいずれも1ですから、総合特性値は1以上の情報を総合しうるものでなくてはならず、各主成分の分散は固有値 $\lambda_i$ に等しいから、 $\lambda_1$ となるのです。 $\lambda_1$ が1より小さな主成分は、前述のような総合特性値を抽出した後の残渣と見るべきだと考えるのです。

重回帰分析における変数選択問題でも同様の考え方が重要です。数学的には、 $X_1, X_2, \dots, X_p$ を用いる重回帰式を“真のモデル”（true model）その中から $r$ 個の変数だけを選んで作った重回帰式は“仮りのモデル”（provisional model）と称して、そのふたつのモデルの違いをいろいろ論じますが、これは筆者にはほとんど無意味としか思われません。現実には“真のモデル”などは存在せず、目的変数 $y$ を説明するのに、 $(X_1, X_3, X_6)$ を用いても、 $(X_2, X_4, X_5, X_6)$ を用いてもよい場合があるのです。説明変数 $\{X_i\}$ の間に相関があるから、これは当然のことであって、今年のイネの収量が高かったのは、7月が高温であったからと言ってもよいし、7月の日照時間が長かったからだと言ってもよいのです。どのモデルを採用するかは、その重回帰式をどのような目的に用いるかで定まるのです。

林理事長は、「データ解析においては、データによる現象解析のフィロソフィーが主導するものでなくてはならない」と言っておられます。筆者は、C.R.ラオの「統計学は今世紀の新しいテクノロジーである」という言葉から借用して、「統計学はデータを対象とするテクノロジーである」と言っています。テクノロジーであるからには、論理の飛躍も発想の転換も許されますし、異なるアプローチによって同じ目的を達成することもできます。そこが数学との違いです。

「行動計量学」に携わる方々が、数理統計学の枠組から解放された“自由な”データ解析を駆使されて、それぞれの分野で成果を上げられることを切に期待します。

[会報34号（1984）巻頭言、当時：理事・東京理科大学工学部、2002年逝去]

## 林 知己夫先生の師縁に感謝して

宮原守男  
虎ノ門法律事務所

### 1. 林知己夫先生との出会い

日本行動計量学会は、林知己夫先生がおられたから誕生した。先生の推薦で設立時から監事となり、無償の法律顧問の役割を果すことになった。

林知己夫先生との出会いは、東京大学法哲学の碧海純一先生の紹介による。私が『裁判の予測とコンピュータ - 経験法学からみた裁判過程 -』の論文を書くためには、林知己夫先生の創案された数量化理論を使う必要があったからである。数学は全くの素人で、数量化理論が一体どういうものかも皆目わかっていなかった。先ず林先生から直接教わった方がよいと碧海先生から薦められたからである。

### 2. 日弁連の懸賞論文に応募

昭和40年に日弁連で懸賞論文の募集があり、審査委員の一人であった森長英三郎先生から、応募しないかと声がかかった。1等賞金額は5万円（当時強制保険の死亡保険金が100万円、現在3,000万円だから30倍として150万円相当になる）2等が3万円、それ以下は賞金なしであった。ちょっと魅力的な金額である。よし、1等賞を狙ってやろうと考えた。審査委員（委員長は早稲田大学の戒能通孝教授）は法律家ばかり。そうだとすれば、最新の法律学 - 経験法学を基本にして、コンピュータによる裁判の予測の論文を書いてみよう。当時のコンピュータはまだカタカナで現在の漢字のワープロはなかった。

法律は、法律 (Rule) を大前提、事実 (Fact) を小前提とする三段論法によって、法律 (R) を事実 (F) に適用して、裁判 (Decision) がなされる。 $R \times F = D$  のモデルである。しかし実際の裁判は、そのような単純なものではない。経験法学は、リアリズム法学ともいわれ、三段論法による裁判を批判し、法律 (R) と事実 (F) とが裁判官のパーソナリティ (Personality) の刺激 (Stimuli) となって裁判 (D) がなされるという、 $S$  (刺激)  $\times$   $P$  (裁判官のパーソナリティ)  $= D$  のモデルを打ち出した。

経験法学の解説だけでは、1等賞を貰えない。コンピュータによる交通事故の慰謝料の予測をしようと考えたのである。これには林知己夫先生の数量化理論I類を使う必要がある。数量化理論で論文を書く以上、その原理を解説しなくてはならない。そのため、林先生から直接講義を受けることになった。

林先生は素人の私にわかり易く解説して下さった。社会現象は非ユークリッド空間の中にある多次元の座標軸をもつ。これを数量化するという事は、その座標軸を全体的に調和的に一次元に変換することである、ということをお教えくださった。

### 3. 林知己夫先生の師縁

裁判は、裁判官の勘による推論で、線形的、単線的な一本の糸を辿ってなされるものではない。行列的思考とか多変量解析の手法によらなければ裁判官の勘による推論は解析できない。林先生の御指導によって懸賞論文は完成し、予測どおり1等賞金を獲得したのである。これはひとえに林先生の師縁によるというべきで感謝してもしきれないのである。

[名誉会員、元監事]

## 初代理事長 林知己夫先生の思い出

肥田野 直

東京大学名誉教授・大学入試センター名誉教授

敗戦後間もない1948年に行われた「読み書き能力調査」の委員会で林知己夫先生に私は初めてお目にかかった。この調査は15歳から64歳までの全国民を対象とし、層別無作為抽出標本約17,000名に対して行われた。集合調査法であったにもかかわらず参加率は80%を超えた。その際には進駐軍のジープでサンプルのお年寄りを会場に運ぶというエピソードもあったと聞いている。教科書どおり行われたこのサンプリング調査は個人情報保護がやかましい今日では到底考えられない昔の話となってしまった。さて、この委員会で活躍された先生はその後世論調査や選挙予測に適用分野を広げられて時代の寵児となり、様々な分野で多くの人材を育てられた。

日本行動計量学会は先生によって育てられた手作りの学会と言ってもよいであろう。

この学会は先生に強く影響された人材が集まって出来た。したがってその出身分野は多岐にわたっていた。統計学、工学、医学など自然科学の領域にとどまらず、政治学、経済学、社会学、国語学、心理学などいわゆる人文・社会科学の領域に及んでいる。この学会は共通の方法論によって結びついた一種の学際的な組織として出発したと言えるであろう。

先生は常に「データをして語らしめよ」と教えられた。どのような領域であれ生のデータから結論を導き出すのに最も適切な処理手法を考えられ、既存の手法にこだわらない新しい計量化のモデルを次々に開発された。その独創性こそ先生の持ち味であり、偉大さの秘密であったと私は考えている。先生はまた、日本人の国民性研究のような長年月にわたる壮大な規模の研究も中心となって推進された。全15巻「林知己夫著作集」は先生の多彩な業績を物語る記念碑である。

先生は13年9ヶ月の長期に亘り本学会理事長を務められた。私は先生がまだまだ続けてくださると信じていたが、突然思いがけず第2代の理事長をお引受する羽目になり、力不足を曝け出す結果となってしまった。それにもかかわらず何とか任期を終えることが出来たのはひとえに事務局長として補佐して下さった江川清理事のご尽力のおかげであった。心よりの感謝を記して本稿を結ぶ次第である。

[名誉会員、第2代理事長、1998年度(第13回)功績賞受賞]